

提携米通信

2012年正月号・黒瀬農舎



謹賀新年 穏やかな年になりますように～

新年おめでとうございます。
 皆様お穏やかな新春をお迎えいただいたでしょうか。
 昨年は、大震災や原発事故或いは群発地震や豪雨災害が各地にあった異常な年でした。
 今年のお正月は、平素、厄除けや招福などの節には気のないタイプの人々も、被災された人々の生活基盤の回復と共に、世の平安を祈られた方が多かったですと思います。私もその一人です。

さて、半地秋日のこの冬は、クリスマス前から一節の銀世界。時々地吹雪が荒れる本格的な厳冬期に耳々とりました。

暖冬・異常気象がふられる近年には珍しい本来の秋日の冬が戻ったようです。

一日中道路もツルツルのアイスバーンで年末の作業が立て込んでいた中で下部合もありましたが、「米作り」という自然相手の仕事をしている身にとっては、寒い時期に寒くなったことは、ホッとした気持ちを与えてくれます。

おまけに、元旦の朝は青空が広がる快晴でした。

この先の入候については読めませんが、一年のスタートが気持ち良かっただけでも嬉しく思った新春です。

ところで、昨年11月には、リンゴの斡旋を頼まれている洋軽と秋日・平鹿（ヒラカ）のリンゴ農家を訪ね今年の作柄やリンゴ作りについて色々聞いてみました。

私と同業の「農業」とはいえ、リンゴ農家のご苦労には頭が下がった次第でした。

1月2月は雪の中で連日枝の剪定と雪折れ防止の過酷な除雪作業。4月は受粉作業。その後、摘果作業。袋掛け作業。除袋作業（玉を付かせる為）。摘梨作業（玉に日が当たるように、余分な葉っぱを摘む）。玉直し作業（玉の向きを変える。）そしてやっと収穫。

その収穫も、お米のように機械で一斉に行わずに、1果づつ手で収穫し、1果づつ選別して、1果づつ磨いて、1果づつ箱詰め、という作業の連続です。

昨年は、前年夏の猛暑で花芽が30%に減り、豪雪で枝折れ、春にはヒョウ雪を受け、被害の少ない農家で半作、平鹿のフジは20%以下の凶作とのこと。

フジは特に品下地で、ご予約頂いたリンゴの確保は容易ではありませんでした。こんな訳で、玉も小さく味もやや落ちたかも知れませんがどうぞお許しください。

では、この一年のご支援のお願いと、御家の皆様のご健康をお祈りして正月号の挨拶と致します。

提携米 黒瀬農舎

〒010-0445
秋田県南秋田郡大潟村西1丁目4の7

黒瀬 正・友基

TEL: 0185-45-3088 FAX: 45-2887



☆お餅のご利用ありがとうございます。
 ☆餅袋の目側の水濡は温度差による結露です。開封しない限り常温保存でOKです。☆未開封でカビが出た場合はご連絡頂ければ代品送付します。

E-mail: akita@kurose.com Web:

提携米 黒瀬農舎

検索

自然征服の農業から自然と共生・持続する食糧生産へ

新春号にあたって、我が農舎の栽培姿勢や経営姿勢の一端をあらためてご紹介することに致します。(昨秋ある田舎から依頼されたお米作りについてのコメント原稿を再編集します。)

黒瀬農舎が有機のお米作りを始めた経緯

日本の農業生産現場に化学合成された「農薬」が本格的に使われ始めたのは昭和30年代始めからです。(従って、昔のお米作りは「全部有機栽培」だったとも言えます。)

それまで日本の稲作農家は、草取りに大変な苦学を強いられたり、ウンカやイモチ病などで壊滅的な被害を受けることが度々あるなど悩んでいましたが「農薬」の出現で、これらの苦学の多くが解消しました。

しかし、半時の農薬は特に毒性が強く農家の健康被害や河川の魚が死滅するなどの被害や、農業以外の産業でも化学合成物質による公害が大きな社会問題となってきました。

昭和50年前後から、レーチェルカーソン女史の「生と死の妙薬」(後の「沈黙の春」)の流れを酌む有言佐和子女史の作品「複合汚染」に感服された先駆的な人々による、目指す目的で小規模な経営形態の「有機農業」が各地に芽生えてきました。

一方、私は昭和50年に入郎淳斗拓地の湖底に、半時としては大規模な稲作経営が展開できる泥沼のような荒野を手に入れ、効率的な米作り基盤の確立に全力で取り組み始めました。

昭和60年代始めには、経営基盤もほぼ確立したものの、効率追求型の稲作経営に疑問を感じて、稲作経営の先進地であるカリフォルニアを訪れるなどを始め、食糧生産についての情報を広範囲に収集して、自分が納得できる稲作経営の姿の模索を始めました。



手取り除草風景 011.7.15

この結果、効率的な近代農業は、工業による公害以上に、世界どこでも、自然環境や健康に悪影響を及ぼしており、世間一般に「農業は緑の産業」と位置づけられていることの虚構に気付くことになりました。

そして「食糧生産は、自然環境を直接破壊する宿命を持つ産業だ。」同時に「食糧生産は、人間にとって一番大切な産業だ。」……従って、「大規模農業」に属する私たちの農業経営も、アメリカなどの自然征服による効率追求型の近代稲作経営を反省教師として、環境に負担をかけない農業を目指すべきだと考えるようになり、化学肥料や病害虫農薬は原則的には使わない栽培に向かったものです。

有機農業が抱える問題など

化学肥料や病害虫農薬を一切使わない栽培は、一般栽培よりも収穫量は少なくなります。

また、20年を超える経験を積んでも、雑草や病害虫の大発生で壊滅的な減収になるリスクが常に付きまとい、例え乗り越えても、栽培期間中は日々苦学が絶えません。

付近の有機農家の最近の動向は、収穫減や、リスク、苦学を理解してくれる消費者が昨今の下落で減少し、①有機農産物価格に十分反映できにくくなってきたこと。加えて、②農薬化学肥料多投の一般経営には、多額な補償金や補助金が交付される制度が出来たこと。この2つによって、残念なことに最近、有機農業を止める農家が増えているのが現状です。

でも、我が農舎では、栽培上での苦学も多く、経営収入の上でも、農薬化学肥料多投型の効率的な近代稲作経営を超えることはできませんが「納得できる楽しい有機米作り」を実感し、これを半時は継続できそうです。

この「楽しい米作り」の実感原由は、経営スタンスを、経済合理性などの目先の利益追求＝パーソナルで心の狭い経営視点から、地球環境や多様な食糧物追求など心を少し大きくして、パブリックな視点へ転換したお陰のようです。また、この経営視点を理解共有下さる消費者の存在に支えられているからだと思えます。今後もご支援を宜しくお願い致します。



除草機掛け 011.6.25